

Zoom Up

人

地域医療の担い手として、
子どもの成長を見守ることができる
これ以上の喜びはありませんね



赤坂 徹 さん

●あかさか・とおる 赤坂こどもクリニック院長。昭和44年弘前大学医学部卒業。聖路加国際病院小児科などで臨床研修を行い、アメリカへ留学。埼玉医科大学、国立療養所盛岡病院、国立療養所八戸病院、もりおかこども病院などでの勤務を経て、4月21日、西根地区に赤坂こどもクリニックを開院。趣味は旅行。「きちょうめんな性格」と自己分析する63歳。新潟県新発田市で生まれ、青森県八戸市で育ち、現在は盛岡市在住。



赤

坂院長は、小児科のほかアレルギー科、診療内科を担当する勤務医として、国内外の病院で経験を積み重ねてきた。小児科医として、多くの病院に勤務してきた赤坂院長が理想とするのは、地域に密着した医療の担い手として、健診などを通じて乳幼児から子どもの成長を見守り、病気の予防や健康維持に役立つことなのだという。

父親が教師であつたことから、少年時代は教師を目指していたという赤坂院長。医学を志してからも、子どもと関わりを持つために迷うことなく小児科医の道を選んだ。「今でも、学校の先生をうらやましく思うことがありますよ」。そう語り、赤坂院長は穏やかな笑顔を見せる。

「何でも自分でやろうとせず、限界を知ることが大事です」という赤坂院長は、小児科のほかにアレルギー科、診療内科を担当する勤務医として、国内外の病院で経験を積み重ねてきた。小児科医として、多くの病院に勤務してきた赤坂院長が理想とするのは、地域に密着した医療の担い手として、健診などを通じて乳幼児から子どもの成長を見守り、病気の予防や健康維持に役立つことなのだという。

赤坂院長の診療は、患者とその親と向き合い、話を聞くことから始まる。話すことのできない乳幼児だけでなく、患者と家族の両方から話を聞きながら診療を行う。家族の心配を解きほぐすと同時に、恐がらせないことを重視しているのだ。

地域に信頼され、愛される病院にすることが目標という赤坂院長は、病気を治療するだけでなく、子どもの健康維持にも気を配る。生活環境などを含めて、子どもが安心して子どもでいられるための手助けもしたいのだという。

誠実な姿勢で患者と向き合う赤坂院長と病院が地域の信頼を得る日も、そう遠くないことだろう。